

6月1日

殉教者ジャスチン

Ιουστίνος

(100~165頃)

～2世紀のキリスト教弁証者～



「ユスティノス」

2世紀の古代キリスト教の弁証家の中で最も優れていると言われる。ジャスチンは英語読みで、人名辞典などには「ユスティノス」と表記される。

彼はバレスチナのフラウィア・ネアポリス(旧サマリア地方のシケム)で、異教徒の家庭に生まれる。求道心を強くもつ彼は、ストア派・ペリパトス派・ピタゴラス派とギリシア哲学を遍歴するが失望に終わり、プラトン派にその満足を見いだす。

あるとき、海岸を歩いている彼に一人のキリスト教徒の老人が話しかけて来た。老人はジャスチンに哲学よりもすばらしい学問があることを告げる。それが聖霊による預言者たちが示す、神認識を説くキリスト教であり、聖書を読み、祈ることをすすめる。ジャスチンはキリスト教こそ「唯一の確実で有益な学問」であることを悟り、130年頃、彼が30歳ぐらいのときに回心する。

回心後ジャスチンは、自分の学問を当時迫害されていたキリスト教を守るべく使うことを決心し、キリスト教哲学者の自覚のもと、あえて哲学者の服を着てエフェソやローマで教えていく。

彼はキリスト者に対する非難に弁明するため、また旧約聖書からキリストの神性を弁証するために「第一、第二弁証論(護教論)」を二人の皇帝に対して著す。また対ユダヤ教に対する弁証で

ある「(トリフォの)対話」を書きあらわす。

ジャスチンはその後、キュニコス派との論争を機に、キリスト者であるがゆえに六人の弟子(うち一人は女性)と共に処刑されるが、その時、「お前は天国に行けると信じているのか」と問う裁判官に対してこう告げたと言われている。

「もし私があなたの言っているように苦しめられたら、キリストの掟を守る人の報いを受けることを希望します。そしてそれを疑いません。」

彼はギリシア哲学を大切にしながら、ロゴスの概念を用いてキリスト教の真理を弁証した。その考え方は後のキリスト教における、キリスト教と哲学、さらに信仰と理性の関係や、創造論やロゴスキリスト論などの教義の形成に大きな影響を及ぼした。

(Y)

<特禱>

全能の神よ、あなたはみ力と恵みによって、聖なる殉教者ジャスチンに苦難に勝ち、死に至るまで忠実である生涯を与えられました。どうか恵みをもってわたしたちを強め、どのような迫害にも耐え、主イエス・キリストのみ名を忠実に証することができますように、主は父と聖霊とともに一体であって世々に生き支配しておられます。アーメン